





綾錦卷之中

沾涼緝



此名の一字を露言に洗らすと

色を濁せ濁しをくらす花の露 露沾

白紅今ぬく沾涼と 百福壽序略前

此一字廣く出らえとくらしり 全

賜沾字の時 六のまかのまの彩あり

十分いゝる海ふそとや 夏菴波 沾涼

露沾へ一字を送る

飛石子固めや 中かぬ花標 露沾

花月(那)の一字を送る

世の美を雨路を走らぬ人 全

中

一

江都當時宗匠

次第混雜

凡風之清一岸也 柳之如
天津橋時乃有之 以多母大工
乱きてい鬼子降る 夫乃堂也
尺の花にさし海の日なり 月今有
一節の滝乃さうとや じ先の花
早し女を注ぎし 驛の足ぬるのを
花も燃も万葉よりを 東方通
幸崎の松をあらふ 子天の川
梅のつゆのさく 志の女井乃煙
を波や 味も 牛の 毛は上

千翁
周竹
沾洲
山夕
批翁
一漁
倫里
當国
湖十
更登

鯨の目不便の又ある 月今有
とらふ一の吉原披せ 存は月
凡能姑舌歩を待 あつは素
初雪や 苔の細る 自きいよの
月尺聖の物とや 和めて 寺公の
とらふや 作聖二 亦同子 是え
馬の唇の側く 一口かきつる
帆柱の 一穂の 糸一 糸は乃川
ふも川を刷毛 使くし 紅葉鮎
水多に 之く 負なり 一 一 鯉
兼も 海も 葱も 亦あて 之の 菊

貞佐
和推
不局
青^{前田}峨
今更
水国
來川
陰威
貞山
超波
百洲

吹とく——
武藏野に福の浪や水の雪
竹煙に麦の穂をよく晴る
青架下雪の下りあのみ
水伝の氷涼唯——
ふやれ石會乃力柔比奈
柴の——貝のむらと送り菊
稚子ぬき田んぼと保、荷
馬埃り佐聖の滝の巽の外
小舟中も所 姫門あり郭云
舟の花乃夜とまきぬと厚の勢

壽角

沾山

乾竹

壺月

露牛

常仙

尾谷

逸志

舞山

成屋

永機

沾涼

風堂

潭北

路つと源火地——かげり春の芝
帯——梅水伝のあかみ
名月——舟の海とて拙小文
右ノ句——得るあり指しあり以て
其趣く而もまふ樂ふ好差列柳——
○古來点取乃巻を得きり其点ハを
句ノ此品を字——二三軸のに記

寛永頃 乾堂未得点

割
学乃たよ里と 林出 堂大 正勝
可入

中

氣を掃く月乃八月乃乃音よそ

幸粮

泉ありを又る今朝の後移

源より如合如是腰ぬい位

と道なる路より一に俗人

振策に柳不鯨のほく答を

併つて音を折いいの中

番西のうくする家の棟上り

幸粮

又とくいうた是才被治り子

刻出ゆく船のとも金をとひ色猫

求音

一以百韻 未歌

付書五拾六

廿月長三



墨印

廿五白宛

幸粮 点十六白 内長中

可入 点十五白 内長中

正勝 点十六白

求音 点十白

中

四

寛文頃

松樂軒立志点

九隆

花を色じまや家乃風流の 怒流

去お志の世色は 笠松 全久

おう雪おりし如く 糸も 卜入

よみよみ 年い ぬる ぬる 由宜

着利ぬる小袖 以 縁の 空 春室

河ハ出 舟も 去りし 此友 重次

久の 面より 酒を の 膳平

袂の 宮中 に出る 市立 叙情

ハ 懐ふる 魚も やあ 先 枕筆

親め 先いそ 子ハ 室 寺 調和

一頃の 行て 未略之

下書七拾五句

竹長 九八

三月十日

墨印



刊
刊の乃車浪よや去乃駒
菊母氏
行尚

自服略

二丁七の甲

行中

乃

乃

乃

墨印



朱三子

丁

切
切の乃小町
乃

調和門
風堂

自服略之

俸

乃
乃

乃

印

歌の境より娘とのをさるる鶴 尺草

露言門

此の巻の終りありては言宗師の
御心せしむるより尺草老人の物語なり
よみては白ひくしてその巻の長点を
乃終るへ言ふとわけて平旦し

古才七絶

七
改

あふ

印不見

元祿頃 續二百韻 初調和評

一 漢

雨ハ水やそるる舟ハ物中 唐采

六 夜ハ楫ハ勝を 斬ハ良務

五 詩ハ林ハ大同ハ林ハ鄙園ハ 白徳

五 林ハ野ハ人と傳ハ淑望 浮中

長 新月ハ酒ハのさへて漆栗毛 桃翁

五 意ハ悲ハ猿ハ松ハ賊ハ雅 未立志

四 芥ハ指ハ船ハのさハのさハの物 舟竹

八 笑ハ條ハ出セトハ殿ハを刑 子英

○中

○上

四、尚カと利休、梅香を致す。 花笠

孫子雪より、涙の氣味、色

一、境の懸く、宿後を音傳す。 鶴

四、昨の海々々、神々々、貞室。 後和

五、友眼減らし、一字乃二柱。 詠居

長、往昔ハ智を傳ふ。 時軒 節七

四、和樂と名有る、猶も自然に。 和英

長、君ハ仁こそ、万物出、由處。 蓬雨

十二、以月の寫上、川ノ水、濃多子、摺。 幽蘭

四、糸、秋を謎、一、ある密法。 丈岳

座甘 金獅 長雅 旭志

一、唯而已、い、未、略。



十、

此所有印略

七、

調和

朱印



志二草に根を以てて豊園野
 服之略之
 全露月十云
 識月

丹多
 五
 可
 可



採葛

茶に味を付する雪の且之如
 吳竹

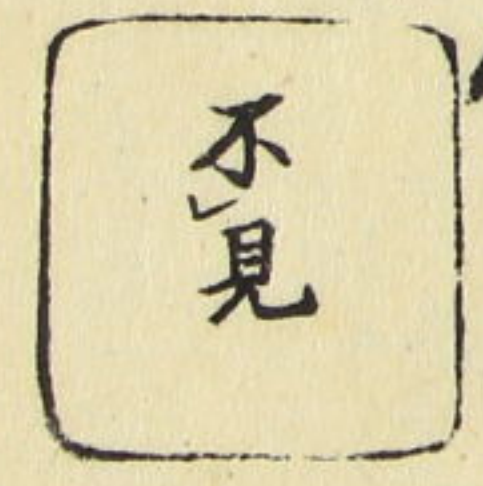


碎中宛未書

此取点印譜略之

玉工

雪



不見

鳥

鳥天八種、以取之、是、外、南、紅

昭ヨリ畧

沾涼

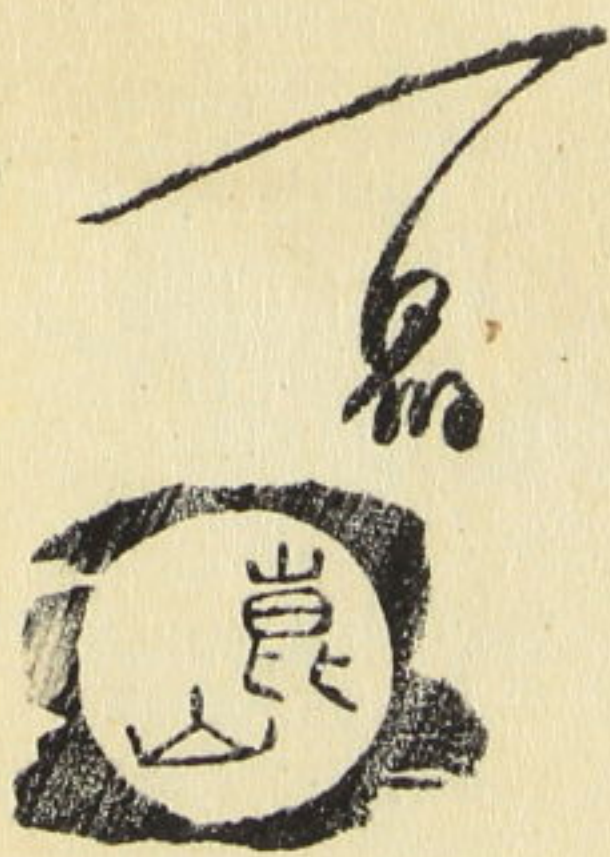
村市

鳥

鳥

鳥

鳥



朱

鳥

今百二十云

周應

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

○

○

珠
北石乃水のたまりに
千楓



十乙張中

北同有印略

長一五

二代目



立志

釋

山吹の流〜黄なる目好の外 正共

脇ヨリ略

残墨八句

山吹

美斗心

花下

花下

山夕

●通只氏
前山夕



○

○

銀

登形平字之ニ所白ハ青

北村

東巴

昭ヨリ畧

魚目見九ノ一

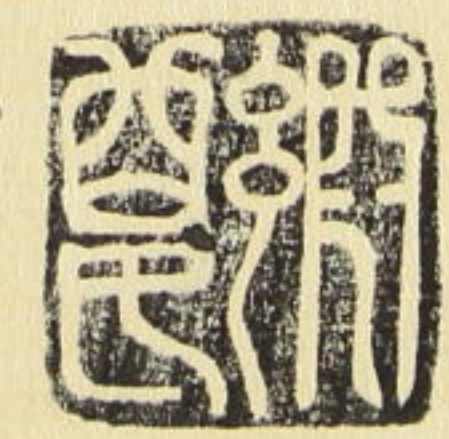
銀長一

新長一七

長七

鳥七

調



十

山邊月
丸く

く

調



沙考丸

印

長

調

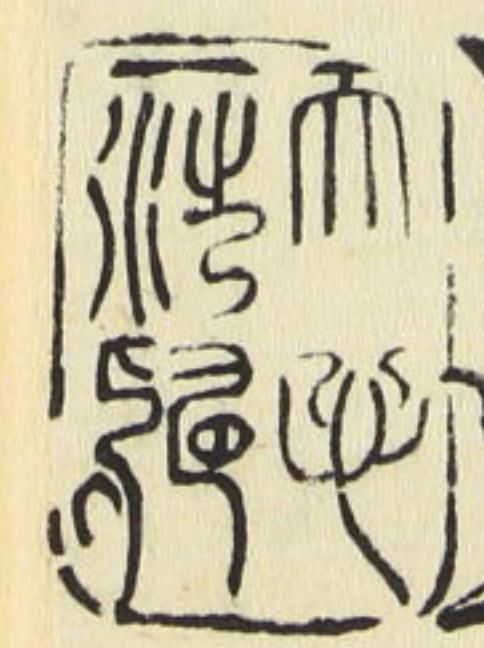


中

中

歩よる浪
渡水
新酒の安房上総
蓮之

淡ハ名也
形ハ朱ハ
長サ三四
浮生



物ヤある極
刻
心
九十九度
川勝
丈岳



之
心
心

一
まの



對揚

真乃同の緒佛を及る異なり

宮川

千風

新元上

平字

長生の所

年七十四

丁亥

泰復

金夷然

河組の松を結

鈴木

東隣

服より略



信留

有美押

白



あまのきりぎりす

中

田

朱
志之
雪朝

古
輝
二

年
五
長
六
為



珠
今魚路云
玉宇



一
一
中

卷
中
七

立
志



三
代
目

中

下朱

海ありまきくい富士の裾 宇田川 未二

百千鳥

雲々五 餘等級

以貌

佳風



此集以

凡乃夢よ奈須み与市も云々 千翁

人比^{カタヨツ}云和歌に作通^{カタヨツ}なりと

通^{カタヨツ}の師ありの象の如人の花 沾涼

和歌無^{カタヨツ}師匠唯以^{カタヨツ}舊^{カタヨツ}歌^{カタヨツ}為^{カタヨツ}師^{カタヨツ}深^{カタヨツ}心^{カタヨツ}古^{カタヨツ}風^{カタヨツ}習^{カタヨツ}詞^{カタヨツ} 於先^{カタヨツ}達^{カタヨツ} 下略

注云 和歌ハ自然の発得の境界なす人ぬ教の^{中略} 習詞於先達とあるはこの海は自然相違あはし 仰り^{カタヨツ}事^{カタヨツ}也^{カタヨツ} 河を^{カタヨツ}是^{カタヨツ}過^{カタヨツ}る^{カタヨツ}智^{カタヨツ}の^{カタヨツ}不^{カタヨツ}の^{カタヨツ}作^{カタヨツ}る^{カタヨツ}と云義し^{カタヨツ}と云

○當時宗匠ハ添削一兩巻札下にありを
此^{カタヨツ}也^{カタヨツ} 終^{カタヨツ}の^{カタヨツ}教^{カタヨツ}

龜背

郭公法乃以和の中禪寺 中車

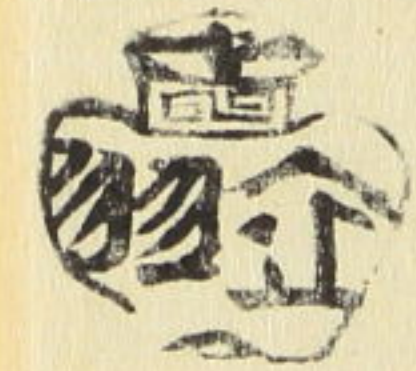
不見

九丁線

一巽丁也

外多丁下身

信



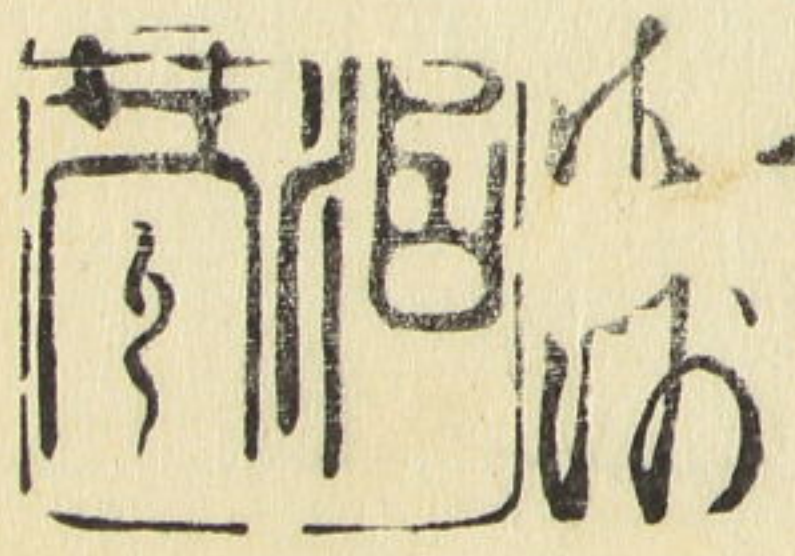
朱

大符の精をみるくや物さる 五百瓦

浦 善 於

朱 上

四 長 一



中

中

中

十六

○中

威情ハ
朱
乘小
乃
布仙



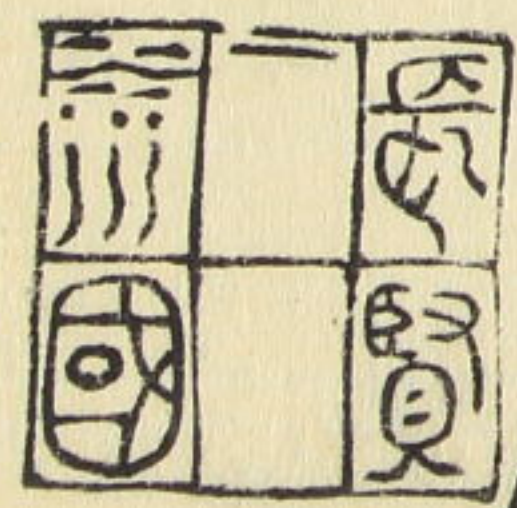
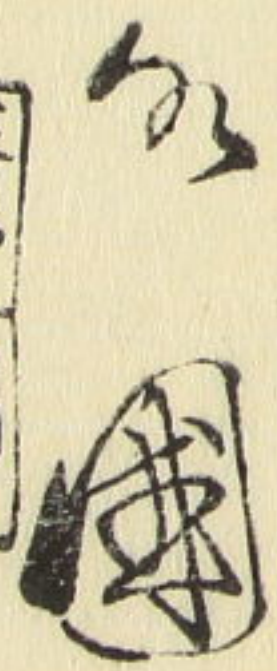
松
長
子

乃
子

一
德
印

松
朱
清
琴
も
若
々
之
至
庭
乃
雪
梅
五

七
女
の



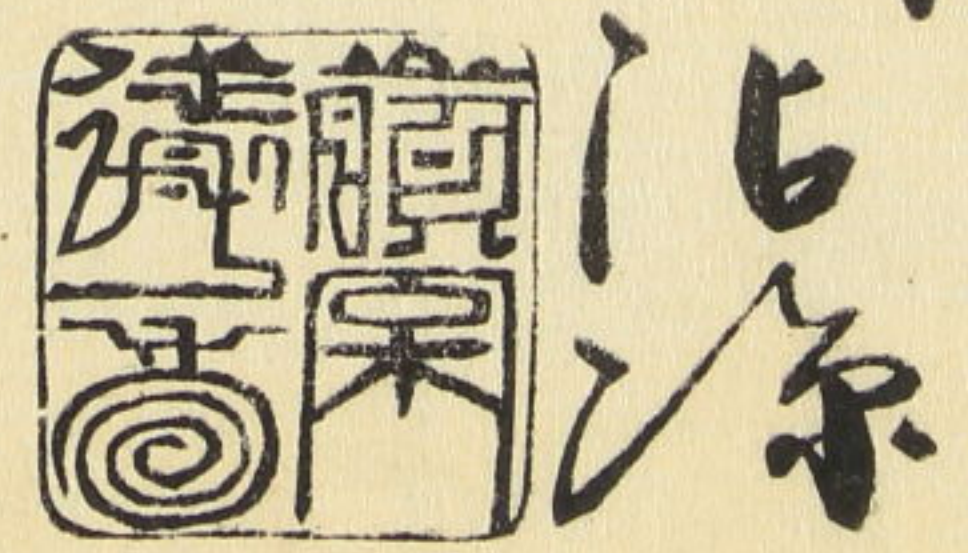
○中

○六

野
朱
繪
倫仙

國色

火
林
印



當時宗匠点印譜 次第不同

調和印

獅子

以辭爲用 十五 兩朱 七 長 三
紅絲石 十 朱 五 九 二

堀尾和推

玉姿 十八 回文錦字詩 十五 新月色 七
花影上欄干 十 回雪 五 長 三

栗岡貞佐

筑波山 三 珥比磨利 十五 異玖用加 十
祢菟流 七 朱 五 長 三

樺井山夕

彈夜月 二十五 天壽 十八 金氣艱精 十 丹頂 五
立夏清風 至十五 君子鳥 七 長 三

鶴海一漁

金猪 三 映朱 十八 銀輪影斜 十 朱 五
玉夫弄桂花 十五 廣寒月 七 長 三

桐洲貞山

五更 二十 四更 十五 二更 七
三更 十 一更 五 長 三

内田沾山

神物護持頌句 丹鳳十五 蚤中詩十 風檻七

簷花雨平 宗玉韻士 玉鵬八 孔彰五

無上室準句 天心月廿三 寶玉二十 千珠十七 神妙五

秀逸十三 無極十二 大極十一 銀漢十九 曜九 蒼溪八 立羽十 翁

龜脊七 俊六 豪五 英四 朱三 長二

羅浮夢十八 東閣詩情十 朱五

月黄昏十五 江南梅七 長三 貴志活洲

水調歌十八 春江花月夜十五 清平調詞十

長相思七 朱五 長三 江川百洲

神慮感平 一種風流推國色十六 色典香色價十三 有玉声十

神慮感平 三年一平七 白宇留利五 長三 瀨尾拙翁

頌滿耳十八 崑崙玉餘十五 乘水金十

千載觀七 朱五 長三 雲津水國

花重錦管城 楊彩二十 三光十五 車輪玉十二 黃禽十

錦管城 曲浪八 行帆七 朱五 長三 三田白峰

無盡室 准夕 天高月二十 化玉十七 神龍西 秀光十三

華德十二 有隣上 文飛十 螢雪九 枕書八 立羽不扁

鷄窗七 順六 樂五 好四 朱三 長二

其角印 一日長安花十 洞庭月七

半面美人 越雪五 長三 九二 曾湖十

天地陽花二十 清奇加五字二十 壽陽公至十

笑桃李七 朱五 長三 笠家逸志

翰林賜錦袍廿五 玉堂雲霧窓二十 金榜題石十五

一枝桂十 黃甲七 朱五 長三 帶金舞山

室鼎半 龍七十 鳳五十 秘曲二十 簫廿九 磬二十

三籟十五 呂律十三 宮九 角七 羽五 長三 且立來川

屋敬十八 金銀十五 四字十
三字七 朱五 長三
長坂成屋

醉中翫眉雪印 墜玉簪百花如之 翠蓋十五 探荷
百花嬌語十 弄晚涼七 探菖五 長三
櫻井吏登

夜梅三十 睡海棠二十 睡起美人十 國色五
挂二十五 未央柳十五 美舜人七 朱四 長三
菊岡沾涼

仰高鑽堅准 慎其獨十 明德十七 志學十五 晨星而
慶雲十三 道極十二 峻極十一 至善十 齊家九 脩身八 立羽壽角
誠意七 藝六 常五 能四 省三 長二

九龍館十八 壁玉簫十五 洞裏神仙十
大七 壇七 朱五 長三
志村常仙

花生二十 泥書十八 五字十五 四字十
破中玉八 夜光六 朱五 長三
打田今更

古音娥印
薰風自南來十五 海棠七
金声十八 高山流水十 朱五 長三
前田音峨

二妙二十 万斛香十五 月明美人朱五
花千天下春十 雪玉條七 長三
岩本乾什

沉香亭 月雪十五 三字 月七 長三
五字花十二 字雪五 九二
曾永機

五字順句 彭澤二十 孤芳十五 金玉錢十二
寒英十 晚節七 獨秀五 長三
今村陰藏

隨唐十八 花街簫鼓月十五 露往霜來十
支機石七 朱五 長三
石川壺月

蘭奢待十八 千鳥十五 蓬山一樓雲十二
金玉翠珠十 鵜鴣斑七 朱五 長三
千豆尾谷

鳳銜十八 德高比君子五 朱五
 石菴山暉十 長州英七 長三
 清水超波

季吟法印 吟市門人現 吟市父津見氏
尊海和尚 街直參隱居

一僕とほくくあはく花えり如
 一奴とほくくあはく花えり如
 一節ハ木の葉そく福の歎道
古 吟市
今 吟市

其角東坡贊 堤亭下邑氏 現 苔翁右壽衣氏
堤亭奇 点印附属

ワの雪とちと金に中一筆の上
 くらりの尻の葉びき一秋の末
 人の梅おひささく松入くの
 其角
 堤亭
 苔翁

人日

摺小本と遠里小壁乃菘之形 露沾

早春

去る魚や産院淋しき東乃色 扇風
 唯て今朝の残のふあり青乃雪 溶く

歳始二句

初葉松羊乃身や琴山海 南北仙閣花
 赤椀の白ふや春のけいふなを 貞梁氏桃
 春と筆の連者をそりよ葉摘 沾沾凉門橘
 けし富士の朱ふさりとさるる魚 日日門路

初寅

年嵩をそくくあはく花えり如 不水

秦姓嫡

梅 じまーの白のり

梅活きて伴え清く美揚非情くし
門番子海月いなるは梅の昼
うきまの初の花の志の人め
正氣敢言して又朱んじめの花
娘の心ほのりも聞や忘ら梅
吹通も梅や梅立中押

初午

午そくふるふぶの輪前与
ふらふらや初午日水流波ふ
とみらなす中たゆる志の輪荷ふ
とつ午に介の中らるる梅肉

芭蕉門

ト宅
雪朝
沾涼 寺前南法堂
有林 露公門 芳泉舎
沾賀

一漁門

梅宇
五百武 沾涼門
布仙 露公門
露人

上巳

桃啖に鱈子うひて沖濤水
大円の濤いもあり紙雛
能ふに祓代のまの雛外
汐干う如女の如ぬ一束
汐干外せめても蟻の墓香う
汐干なる異身扱一不きて
歩擁のよこよなる道ぬ汐干外
とつくく一命を争ふも桃の色
龍まの大洋に至ん汐干外
まの汐品川ちり安房上総
時津風加えて東の解びる

太平

露沾
竹裏
賀朝 一漁門
標律 貞佐門
有佐 交月人
調山
快山 服部氏
臣女
沾涼
魚路
紀逸

柳

おのをさを掃 漆さるる柳外
知盛も出っへき浪や凡柳
青柳の梢を漕や眉の袖
去年の荷をおりして動く柳外
風て胡少とる廣き柳

花

庭探りて菊も白毒花
水柳の裏千と日如さく
垣百尺の子葉女の葉影
でかれも袖もさく
花見も花を枕の中

芭蕉門

卜宅

雪朝

沾涼

甄

仙

紀列若山
沾涼門

蓮之

宇田川氏

未石

北尾氏

青里

加島氏

好夕

夕佳

極限を失途しし詠め

和歌才門 立勝

千金の虫限もちり

七津洪水堂 篤音

抱へ今世主のさう

水産 落霞

浪の花の何雨らの風を水車

千翁門 分角

沙瀬の風のさして舞

其角門 李條

今月を色えて

英松

色は退き月の機を

改壺竜

名上野乃

足付し通

沾涼門 樓川

花の色若聖子笑

猪飼 千洗

大佛の存りの孝

扇的

知やらん高子下谷

門を合を合すの心
多の仁王を本多の心

清うまゆ

終中一すの心
心門と花子少きや

白魚

志し金や一洗子
志し金や一洗子
星を焚く志し魚

生植

水松や一凡も
水松や一凡も

しる雨子文
負人子力痛
文を聖や去る

るるの心

菜の花や心
勢多の心
菜の花や心

あ申し
うふふ

卜宅
梅五

魚路
五百武

雪朝
千洗
一店

琴月
梅宇

賀朝
安祖
沾瑶
丈岳

沾津
東津
梅五
記之

逸志
調柯

仕五

井戸橋乃いしんくもまき花外

露公門 露庭

空のうへに虎渡ふあぬひらう外

和列郡山 云々

棠の字子屋の園唱かたらう外

孤中亭 其悠

秋扇の紙屑とぬゆらう外

露公門 快山

番祿算とささるあまの如蝶ふり

水戸 沾渡

何より蝶のやうに和牛の靴

希聽

尚世の襪そらへ漢家のむしり

ひし浪らしを下流の流をくま

稿科 菊千

雑春 題まき

田鼠のまき人只今うらうら

未石

うみ背負ふ桂や和泉の藤田まき

江戸八 周皎

姑の女のまきおもしろきまき

只口

長軍さへ牡丹の名ある聖初うら

信州松平 賀朝

出づりやうきよの浅きぬ折子摺

夕報亭 三省

よきまのまきく細の芥うら

云々

大名のまきやうき瓢

水音

長田やおもひ弱める福ら上戸

御柳

越前守保佐

や細入や侍ま外魚千里

和歌山門 立儿

天満宮法集 武皇立郡 蕨宿連

筆鏡子柳や梅やゆり名り

挑舟

神垣の立教喫しむめの輪

万里

大名の味や者物後乃板

李冠

河能なや百大切のしめ板

李角

貞徳門 松永軒
 ●●正勝 宮邊氏 正徳 長子 正興 長子 正全 長子

正勝
 正徳
 正興
 正全

正徳
 正興
 正全

●●西武 山本氏 雪 多壽 郭月 長子 東巴 長子

西武
 雪
 郭月
 東巴

調仙

賀朝

二月十日 亥時 乙未 松永貞徳
 蜀江錦 錦をくくむ 錦歌
 感宮ハ煉情志ハ以 煉と唱へて
 駕籠子ハくくむ 福人此後
 河風小わが けりハ松永貞徳
 芝生ハ 新畑ハ里屋中ハ
 又ハ雪ハ水晶輪ハ化ハ仕業
 やどの也 奇の心 是是七
 去後ハ一城築ハ ころハ合
 格気ハ味香ハ 可乗 押ス

OP

七二

くくくー 夏の夜と夏夜と
さうても月ー 月の燦とこ光
混沌と逆祥ー 入川口屋
布袋の沙汰とる産土神
相物のきよいあやこそから星
瓦礫の減らにるは家
良ぬの素味を軍や味薬
くくくー へくくくー 蔵王堂浮く
は華ー 鐘吹切くくく 命く
あーぬるいさくくく 鯛
くくくー 辛味と海産の魚死す

小町ー の果を十月の菊
世のとをぬくくく ぬる器宿
井ー くくく の滝 三とくく 遠
番所ー 川 坤 皆新くくく 遠
酒呑童子の華くく 大部屋
義盛の荷前て一家の定黒板
程ー くくく ぬるくく ぬる代
姐板に万敷 ぬるくく 三とく
ぬるくく 入店に実も花くく 蓮
ぬるの舌くく ぬるくく ぬるくく ぬる
菓茶真ー ぬるくく ぬるくく ぬる

OP

七

寛永の繪品は海島に
芝居を尺杯に
花なまや人の草冠
いぬ仲ふるも業
ほか

其角

杉尋 久米田氏 押塘 嫡
藤堂家ノ醫 享保十四西工月年 同家醫
沾涼三物組
賀朝 同苗
沾涼三物組

長閑さハ活生ハ海の表づく
ふる工希の文ハせな
其の素もいぬゆるの果さ
古入 杉尋
賀朝
小門吉田氏 賀角

未得老人の祖母の義父と云ふ沾涼子今
其悉を濡しとありあり同く未の一字
をとりにて淋心を改めるの事
邑里堂

其顔を洗ひてせむ新樹ノ如
汗子海とよら藍の蠟ぬき
座敷一此床しふをつきて來て
そとくもんやとつ子ハカ
各際をともす月ハ東男
あうぬ芝居 雀 二夕級
鶏取の東ハ西と海ノ 寔濟子
女房乃 痞 精 共 在 入 せ
潔しかい鱈もあまふもを掃
黄ひくさぬり 着ハや 妙

さすまとい目下へおのゝこし併
はじらひの紙の久遠尺重ケ
新也子控案を報る巴月ぬ松
けを畑あきき幾年のさす
白髪おき老いし年々あき
よさる子折しこもる日あき
よねねく喰たをさすくね乃生
鬼のししらをびし深おご
浪の極るともあひてあは浪信
時中のみきよめ是我聞續
了立の拍子いぬける昔あは
智筆のまじりぬしり飯以

涙茶屋いをた馬橋くく大桂馬
干浮をえんさる水のどり歩
白ひ帯に解るるものよを赤百
多事新入より折し新排と
深文子殊極めさる解毒丸
いつの自書をわさるのあき
風子多事ゆの素面之ヶ月出
大乃くさるをさあぬ霧
茶本子袖をぬき解る決さる
鞠のあきかゝ菓子て埋らさ
昔の戰場を馬の道よ白大津
晴風大根唐うの竹合

○中

○書

人唐の至と評定し一勸学舎
ありしをいふこと三月の湯気

●●●
貞徳門
未得
可曉 宇田川
可信 日苗 現
未石 日苗 邑里堂

子
未珠

式及の事いそよに夕暮りせり下坂市とて
しる刀服治の係をくら移る人下
下坂辨所住

あまのくハ一所をくら下坂の門の限り一服治ハ貞徳
垣よき丸のなかり一を
可曉

垣哉てかきこくわき一を今有るをけけん
あまのくをくらしる人下
可信

朝顔をばりたりおかし湯合の面をいれし
朝顔とおかし 夏草を丸外 未石

郭公

神考の火加城ゆり一時多
吟市

中とくまは蛙千更あにや
當国

口生を吾ハ初瓶落しつ時多
賀朝

雲に消へるありと和ほとまは
治原門
し風

物とくまは城のまはれ乃吉田橋
鶴史

あまのくを鏡い物くわ物とまは
李條

傍りの人間子ありは
古竹

髪結子服をまきせの奉とけ
不怠

ほくくまは扱くも枕く老角力
有佐

そ思こくぬ飛波を五人角腕
夕佳

うらうらと得郭くら乳房く如
扇的

○甲

○上

傘さすぬ一樹の陽也晴る

太平 竹裏

素性ハ通照乃子さるる也

うらふ寸の通照素性柳さる

沾涼

玄石十日醉

おハ我度つくさ保さる子歌

秦姓 丈岳

市中一郭云

圃人やさく時多二聖店

松濤奇

魚路

初形ハ多の庵行保さる

沾涼門

涼之

たささく茶にも法あり時多

未立志門

如夕

舞子本々聞せん登帝

日門

愚弊

雨もや冬へあま申く舞子

日門

風志

曉を滝子ささく世保さる

風女翁

杏白

杜宇鳥又おハ一冥達のみさる

不扁

たかく戸の案下のまら柳さる

梅五

通いさる冥達ハ居居さる杜宇

布仙

蕨越一の海に晴さる柳さる

倫仙

いささる水ありしとき時多

伊賀上
宗直

原松

鱗

今海さるまは照浪やまの鱗

沾涼門

五百武

通一矢のかりまはしつり鱗

涼宇

並は色いあまの柳さる

布仙

すい浪子あまの柳さる

露片

周皎

纏う如沖津時多柳さる

露片

沾鱗

絶座の戸のあまの柳さる

古竹

海を出て海より舟一々の艘
宇治川の傍に棧系をのり

沾涼門し風

螢

色買う八八百屋の紫菀の螢外
身あうりの吹賣をうり海より
そまの砂子御くほる外
ましかとふ尼の糸麻の螢うり
秋の音なきく深束のほる外

文岳
露古屋
快山

志村氏
聯志

沾涼

蟬

帆柱の蟬の音きく一尾尾千里
階をくく糖ふらふや蟬の昼
焼るふらふの本陰や蟬乃都

谷田
賀朝

水戸佐
英松

沾麟

端午

とあうりの珠管あうり柏餅
曼珠丹後の母此後あり

梅宇

沾涼

夏日

印肉のともや知ん何よの異子外
海をんで強く音なきあうり外
風風て風音を吹する異子外
あつさうま牛のつゝ人乾切通し
吃りあうり荷の糸や油照り
ちん海のと比並尼のあうり異子外
一月のあうり糸の氣のまうり外
一柄抄の根をたぐあうり外

琴月

沾涼門
沾蝶

不局門
琳角

桃翁門
中車

沾涼

照仙

芦葉齋
乙風

菊千

蓮

かろふきのほしあけやふこの蓮
咲を尽く根の香も道中
風うたて星の居りの道うた
十とくしそ折し平く蓮の指
欠とる蓮の巻葉も森光外

生植

五文字のくろく女も庭つら
筆や他さく福さる牛の鼻
日く乃作ゆりや時中
いろはに牡丹の量も柳もあ
青い雨の六つ七つ花あは

東巴
鶴史
好夕
周午
冲而

一漁
調柯
推
梅至
市紅

昼顔や流る坂のまはれ何ら
姫百合の目まもいしと懐子
去羊足し乃さゆらあは葉も
藤余堂まで流びさるり花葉
咲ける人も人しかなるも
水とくの水の水すし胡青田

其角門 一風
楚殊
調山
沾涼
文岳
志韻

舟のさかや神楽まつあまの舟
舟乃花や真田う丸の胡海を
初風や撥いさきて西東
蓮葉の心
傳てなり信て程なり其あは

安祖
露喬
沾播
萬丁

雜夏

あきりく遠子きり夜之
はこれやゆる事きり夜之
報し合漢の遠し丹波故

東潮門 宗瑞
五山

東隣

莊子に胡蝶の夢あり

露門 皓魄堂

露庭

破子の魚く化し一り蚊の音
ゆぬきや世も生貝の塩加減

露周

ゆきし世も子別く朱扇る

小島氏 雨 桐

志小橋をきりく止る鶴の外

千翁門 青月堂 隣 角

追信し雉子のたぐを枳殻

月 陽月堂 葉 角

景清の蠟しり蜂の響る

月 江月堂 岷 角

其彩の海士の清てつ田子必不三

五月や二十の孝て兄と男

切法池乃志く夜を字と法あり

水戸相 沾 隣

遠きるしとあまうし玉須方ぬふ

日 沾 隣

果報の負人のあふ節の響

宇都宮 沾 隣

天世のなまほりまりやととと人

和歌才 紫 箭

そとつあし冠をきりハ田植在

未 石

菜の戸ハあふよととと田植外

梅 立

あし隈の彩色て来田ととと

布 仙

そとつ後のみとこれ味あり夏なる庭

五 石 武

夏の東やあふとこれかりと心發

服部氏 臣 女

誰と看とねよもききる甚ふ心

原 之

出二十や鳳凰 雜 穂 ぬ ころ

甲州産 若葉 風

中

中

神の孫よ此の世にまよふものぞ 千翁

神祇 鯛のあらう神の留之居の狭箱
一丈の難陀抜色を下物

戀 業平も大豆を蒔きまよふ

無常 かの海にた指のあまの死天の空
女房にも後を足せと妻の

夕乃遊 四季 梓沢巴雲

松 解く水は月流しや松の雪
榊 月を道や鞠をまよふと其柳
撰 葉の秋を散るも桜の暮をうぬ
扱 水もや雷のあらしを 柳浮

題 冬川 哥仙

いふといぬ舟の情さし冬川 五首武

さびしき水車の雪降るも雪 池涼

尺通の鐘も尾上とも明て 倫仙

茶乃柳 餅くじとの初よき 梅五

當年も此の邊の葉 鶴既 五首武

詩と作しき 龍乃葉内 倫仙

日よはう孫て大エのかし鳥帽子 今

從羅川へ出とてあまの身は 五首武

紅粧のし一國をぬき指の跡 今

同屋の長者五尺まぬ板 今

湯げきふ七考よあやうと六部
 じー作里の畫よかき併
 御油赤坂国崎池裡餅の海宮
 龍譚を止る 如毛の帳
 雪とかなる初る雪路乃 白ふなり
 夕さきをさのふしかりふ去り如
 月お海ろ芥生のの里もとやう
 油にあやうし付のりかき 留
 田中果に十さく果浅みらん
 下白を杉し中へ一目
 白よ成ねの輪切りの座喜の
 時代をさし一の紙のり汗

備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙

迦ッよのいかくお素靱をろ里とち
 ころ舞作茂菴さくまのつ
 井慶の孝里小聖乃油貫
 不破とい漏しと事かきの傘
 雲吹い梶原龍像兎談乃書
 下夕へろりしとぶあうんの家
 長衣天切りよ月いち和んと書
 三日り着しい嫁乃まの沙
 能国の孕句おらよけ風
 信治の晴きして盆よ版粒
 田跡いあくらふのよむおとあり
 苔もそ後く 秋堂 秋

備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙
 々々
 五石武
 備仙

備仙
 備仙

酒志海もあゝ海男、花の文 偏仙
去乃白ひの今眺の鐘 振五

師不知
●●得入 小沢氏 季吟門 長子同苗 現
ト尺 始孤吟下云 尺 長子同苗

昔柳の海のとりとをかき 得入

秋乃雲富士をいんくまな海軍より ト尺

一粟一足志さり 萬葉浦の如 今ト尺

芭蕉翁事初よあて始て後をとり 古ト尺の中より

振留袖

伴野小所 式下も梅の中り金巻 沾山氏 沾師

沾原万句享保十二丁未三月十七日 礼物不受
湯治天満宮社にかなる具り 座料

賀

い〜〜和北津乃下はみより 魚路

居候や伸へて子尋乃風北也 五百武

此由子の万句具り起立

花子又よ今羊一万葉百千句 湖十

蔓長し小乃居浪神乃池 佳風

花子又〜苗出千も和菊の松 潭北

香久心や神代の振〜通津今 露牛

而免清き千園子唱〜弟を崔 吏登

連翹ハされも坊主中百の如
 十二層の如くもやむの形も
 毫もつ時藤は乃く如く據
 笠塔や六のてしうの最乃表
 松を法中にひかり花の門
 卦を身むし藤新報七降る
 手柳あり花の下や人此風
 世子鳴きし藤のまし一花の時
 花かしくまうも此口へと并
 園空子こくハありの葉を産
 やうそ名を不二のうへとあつる菊

一漁
 連歌師
 丈裳
 枕翁
 當国
 沾山
 白雲
 百里
 雨橋
 節士
 東巴
 露月

花や今不二の襟りと為草
 月よりれそあきもみ葉は木根
 花はつ一雨満花の時津風
 大島の息もさうの日和外
 華の牙の力を欠する入糸
 うらふすの雨そよを為をを如
 是野や夜も葉曲の花はり
 松の根の腰あまやうと如さう
 芳し一草にかりや名の光り
 藤の廣を智に人き一鶴乃松
 雲子入ると並ぬや筑波山

文岳
 末石
 八十唐
 中車
 東岡
 仙杏
 吳妙
 涼之
 倫仙
 紅夕
 雪朝

苗代に臨み新さるゝあり
 破子とれも小ありを以ては帆を
 承さりや一尺二尺 餘乃足
 花乃口一方白の席を以て坐
 今日の新紋のやゝ 雉子の意
 未久一縁と云ふも 蓮の幅
 けしけしや筆の玉子の色縁
 桂入て菊や 毛万三千句
 沽友 仙魚 林潭 孤舟 出紫 暁漸 黄十

○當日如席一凡百余人かのく賀白あり
 兼白とて事なきも大なる賑あり天竺の如く十二元
 おり行り中巻袖



此

